

# いのちと地域を守る



## 教室に避難袋「常備」

「袋に何を入れましたか?」教員の問い掛けに児童が元気に答える。非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯。賞味期限が迫った食品もあり、「そろそろ入れ替えないかんねえ」と話しながら防災授業は進んだ。高知港から直線距離で約1.5キロ、高知市高見町にある潮江南小。4年生の児童たちが非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯などを入れてきた。高知新聞、京都新聞社、宮崎日日新聞社の3紙に報告してもらおう。

# 教室に避難袋「常備」

5月、高知市高見町にある潮江南小。4年生の児童たちが非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯などを入れてきた。高知新聞、京都新聞社、宮崎日日新聞社の3紙に報告してもらおう。

「袋に何を入れましたか?」教員の問い掛けに児童が元気に答える。非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯。賞味期限が迫った食品もあり、「そろそろ入れ替えないかんねえ」と話しながら防災授業は進んだ。高知港から直線距離で約1.5キロ、高知市高見町にある潮江南小。4年生の児童たちが非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯などを入れてきた。高知新聞、京都新聞社、宮崎日日新聞社の3紙に報告してもらおう。

「袋に何を入れましたか?」教員の問い掛けに児童が元気に答える。非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯。賞味期限が迫った食品もあり、「そろそろ入れ替えないかんねえ」と話しながら防災授業は進んだ。高知港から直線距離で約1.5キロ、高知市高見町にある潮江南小。4年生の児童たちが非常食、防寒着、水、ラジオ、懐中電灯などを入れてきた。高知新聞、京都新聞社、宮崎日日新聞社の3紙に報告してもらおう。

# むすび塾 共催地 その後

河北新報社は東日本大震災後に始めた防災巡回ワークショップ「むすび塾」を、2014年から全国の地方紙や放送局と共催する形で展開してきた。年表参照。被災地・東北の経験は、南海トラフ巨大地震などに備える地域の防災意識を高める変化をもたらしたのか。「共催むすび塾」開催地のその後について高知新聞社、京都新聞社、宮崎日日新聞社の3紙に報告してもらおう。

回数(通算)	開催年月	開催地	共催社
第1回(33回)	2014年6月	北海道釧路市	北海道新聞社
第2回(37回)	10月	宮崎市	宮崎日日新聞社
第3回(41回)	15年2月	京都市伏見区	京都新聞社
第4回(45回)	7月	東京都文京区	東京新聞
第5回(48回)	10月	大阪市住吉区	毎日放送
第6回(52回)	16年2月	高知市	高知新聞社
第7回(58回)	9月	兵庫県南あわじ市	神戸新聞社
第8回(61回)	11月	愛知県碧南市	中日新聞社
第9回(67回)	17年5月	東京都墨田区	東京新聞
第10回(72回)	10月	高知県安芸市	高知新聞社
第11回(75回)	18年2月	神奈川県平塚市	神奈川新聞社



## 京都新聞

立ち並ぶ高層住宅に約1万3000人が暮らす。郊外型団地の京都市伏見区向島ニュータウン。「共催むすび塾」には、自由な中国帰国者や多様な住民をはじめ、近くの京都文教大の学生ら計80人が参加した。異なる背景を持つ人々が暮らし、高齢化や個人情報の壁がさらに高まる。むすび塾で東日本大震災被災者の生の声を聞いた住民たちは、その年から防災訓練を毎月行うようになった。昨年10月12日に、自主防災会や自治会が訓練を実施。

## 宮崎日日新聞

備えあれば憂いなし。その思いを込め、宮崎日日新聞社は2015年度から「防災ワークショップ」を災害発生後、被災地と共催した。避難訓練や座談会などを通じ、津波から語り合う方法を共有し、「ソナウレ」も地域との協力を主眼に置く。防災意識を共有する場を設け、自治会や小学校などと訓練を検証し、それが抱える課題を議論する。17年度までに6回開いた。

## 宮崎日日新聞

宮崎日日新聞社、赤塚 共同して避難を手助けし、近くの小学校で救命講習などに取り組んだ。地域全体の再生に向けた動きも出ている。16年4月から「まちづくりビジョン検討会」がスタートした。このうち防災分科会では、空き住戸を緊急避難場所として活用する協議や、世帯ごとの避難計画の把握などに努めている。

# 地域再生の動き前進

共催むすび塾では、こちらが学ぶべきことも多かった。地震火災への警戒(東京都墨田区)や夜間の津波避難訓練(高知県安芸市)、50年ごとの供養碑建立(宮崎市)などが印象深い。人と人、地域と地域を結ぶ交流をさらに深め、「いのちと地域を守る」の誓いの輪を広げていきたい。(防災・教室・藤田和彦)



## リヤカー活用訓練も

高知むすび塾は地域住民の意識も変えた。高知市の潮江南小学区では、1月5日、高齢者をリヤカーに乗せて避難する訓練が行われた。新年早々に訓練がなされた。約500メートル離れた津波避難ビルまで行った。訓練後は、むすび塾の形式を採用し、住民たちが改善点やその他の備えを語り合った。訓練をしなければ、要援護者の避難の大変さは分らなかつた。支援者も高齢者という状況をどう乗り切るか、といった意見が交わされた。

## 宮崎日日新聞

備えあれば憂いなし。その思いを込め、宮崎日日新聞社は2015年度から「防災ワークショップ」を災害発生後、被災地と共催した。避難訓練や座談会などを通じ、津波から語り合う方法を共有し、「ソナウレ」も地域との協力を主眼に置く。防災意識を共有する場を設け、自治会や小学校などと訓練を検証し、それが抱える課題を議論する。17年度までに6回開いた。

## 宮崎日日新聞

宮崎日日新聞社、赤塚 共同して避難を手助けし、近くの小学校で救命講習などに取り組んだ。地域全体の再生に向けた動きも出ている。16年4月から「まちづくりビジョン検討会」がスタートした。このうち防災分科会では、空き住戸を緊急避難場所として活用する協議や、世帯ごとの避難計画の把握などに努めている。

# 語り部同行「働き掛け」で教訓共有

全国の地方紙や放送局と開く「共催むすび塾」には毎回、東日本大震災の被災者3、4人が「語り部」として同行する。市民向けの講演会で話すほか、避難訓練や語り合いにも参加してあの日の教訓を伝える。災害への懸念が高まる「未災地」で、被災者から直接経験を聴くことへの期待は大きい。「避難したら絶対戻らない」「訓練を重ね避難行動を体で覚えて」「まずは揺れ対策を」などと助言し、災害への覚悟と備えの意識を共有する。各地で始まった取り組みは、思いを分かち合った成果だ。紙面による情報提供や呼び掛けだけでは生まれなかつた動き

# 「ソナウレ!」で協働

宮崎日日新聞社、赤塚 共同して避難を手助けし、近くの小学校で救命講習などに取り組んだ。地域全体の再生に向けた動きも出ている。16年4月から「まちづくりビジョン検討会」がスタートした。このうち防災分科会では、空き住戸を緊急避難場所として活用する協議や、世帯ごとの避難計画の把握などに努めている。

# 語り部同行「働き掛け」で教訓共有

全国の地方紙や放送局と開く「共催むすび塾」には毎回、東日本大震災の被災者3、4人が「語り部」として同行する。市民向けの講演会で話すほか、避難訓練や語り合いにも参加してあの日の教訓を伝える。災害への懸念が高まる「未災地」で、被災者から直接経験を聴くことへの期待は大きい。「避難したら絶対戻らない」「訓練を重ね避難行動を体で覚えて」「まずは揺れ対策を」などと助言し、災害への覚悟と備えの意識を共有する。各地で始まった取り組みは、思いを分かち合った成果だ。紙面による情報提供や呼び掛けだけでは生まれなかつた動き